

大志の森プロジェクトに参加した子どもたちの成長

嶽山 洋志

兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科

1. 本調査の目的と方法

大志の森プロジェクトは里山をフィールドにさとの暮らしやいのちのつながりを体感できるプログラムである。ここではその一連のプログラムが児童をはじめとする参加者にどのような効果をもたらしたか検証することを目的とする。

本年度の調査は全プログラムの前後（1回目のプログラム開始前と4回目のプログラム終了後の2回）に“保護者”を対象にアンケートを実施、保護者からみた児童の意識の変化を読み取ることとした。内容は、「意識の変化（図1に示す8項目について「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5段階で評定を求め平均評価点を算出した）」とし、分析では過去2年間に実施した同様の内容で“児童”を対象に実施したアンケート結果と比較することで、認識の違いを読み取った。また「自由記述による児童の変化」についても第1回と第2回で把握、成長の視点を読み取った。なお回答数は45名である。

さらに今年度の調査では、親子およびスタッフといった3者の会話のやり取りを記録し、その情報から3者の関係性について考察することとした。通常自然体験では体験を提供する者と受ける者といった2者の間で学びが展開されるが、本プログラムは対象が親子でありその際の各主体の役割（特に親の役割）がどのように特徴付けられるかを会話から考察することとした。対象とした会話は第3回を除く3回のプログラムのうちスタッフが聞き取ることが出来た34の会話で、それらについてKHCoderを用いてテキスト分析を実施、使用頻度の高い言語や語彙間の関係について考察し、その特徴を明らかにした。

2. 児童の自然や環境に対する意識変化

図1に保護者からみた児童の自然や環境に対する意識変化を、図2に児童のそれを示す。

図1より、まず保護者からみた活動前後の意識変化で活動後に高くなった項目は「自然は美しいと思う（前:1.11、後:1.44）」であった。この美観に対する意識に関する項目は活動前後で違いがあったものの、感性および知識に関する項目は総じて活動前後ともに意識が高かった。一方、知識に関する項目で「地域の自然について知りたい」という児童の意識は、保護者からみた評価では活動前が0.85、活動後が0.83と差がなかったのに対し、図2より児童は活動後の意識が高く（前:0.78、後:1.12）、また児童は「自分の地域を自然豊かにしたい」という意識も前後ともに高かったことから（前:1.27、後:1.28）、親子に対して地域の自然に目を向けるきっかけをプログラム後に提供することが重要と思われる。

さらに行動に関する3項目についてみると、すべての項目について保護者からみた活動後の評価が高くなった。自由意見からも「教えてもらったことはすぐに興味を示し、自分でも試してみようとしてました」など、得た知識を行動に移している児童の姿に共感したことで評価が高くなったものと思われる。

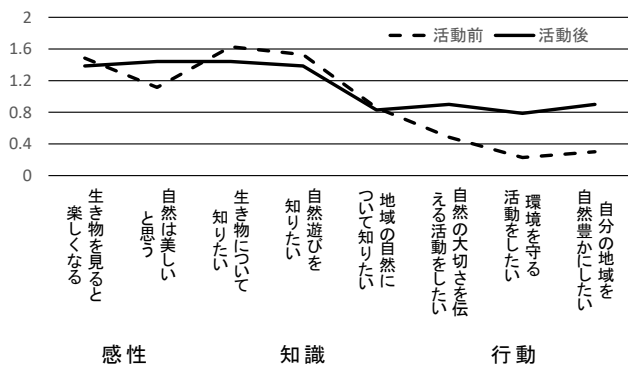


図1 保護者からみた児童の自然や環境に対する意識変化

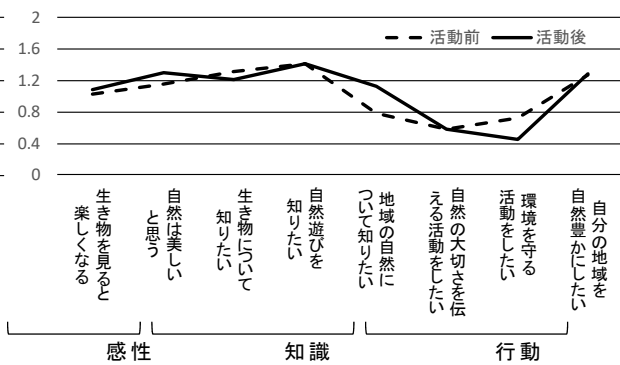


図2 児童の自然や環境に対する意識変化

表1に保護者からみた児童の自然や環境に対する意識変化（自由意見）を示す。

表1より「苦手なものの克服・今まで経験のないことの体験」と「元気にのびのび活動するようになる」がともに15回答と最も多かった。前者はザリガニや昆虫に触れることができるようになるなど、動物との接触体験の克服が大きな驚きであったこと、後者は「田植えははじめての体験で楽しそうでした」とあるように、田植えなどの初めての体験が高評価を得ていることが伺える。次に「主体性の芽生え」は8回答で、「積極的に他の子どもと話すところが見られました」とあるように、プログラムへの積極的な参加だけでなく、発言が積極的になるなど、他者とのコミュニケーションも積極的に図られるようになったことに保護者は驚いていた。その他「新たな学び」についての変化が4回答あったが、「網の使い方」や「ザリガニの掴み方」といった遊び方の上達に関するに加えて、「ザリガニを食べるカモを見ながら「かわいそうだけど仕方ないな」と命を繋ぐことの意味を知った」とあるように、自然の仕組み理解にも貢献していることが伺えた。

表1 保護者からみた児童の自然や環境に対する意識変化（自由意見）

◆苦手なものの克服・今まで経験のないことの体験(15)

- ・虫が苦手でしたが、おたまじゃくしに触っていたので、びっくりしました ・おたまじゃくしをさわっていたのでびっくりしました
- ・泥は普段は嫌がりますが、喜んで入っていった ・昆虫を怖がらずに触っていて、驚きました、成長を感じました
- ・虫が苦手な、今回も嫌と言われていましたが、参加すると初めてのことでびっくりですごく喜んでいました
- ・こわがりの子ですが、気になるものを進んで触ったり見に行ったりしていた
- ・こわがりですが、クワガタやザリガニに触ることができて、とてもよい体験ができて良かったです
- ・残念ながら自分でザリガニを捕まえることができなかったのですが、触ることができるようになりました
- ・汚れるのが嫌で最初ドロに入らないと言っていたのに喜んで入っていました
- ・ザリガニ、虫など普段怖がり触ることができないのが、周りの子どもたちやスタッフのおかげで触れた
- ・生き物がこわくていつもちよんとさわるだけなのに今日はザリガニを捕まえる事が出来ました
- ・初めはザリガニに触ることができなかったけど、池で自分で捕まえたザリガニは触ることができました
- ・最初は少しびくびくしながら池に入っていたけどすぐ慣れて楽しそうでした
- ・今までザリガニや虫になかなか触らないので、頑張って触っていて良かったと思います
- ・初めは触れなかったのが、最後は触れるようになって話も積極的に聞いていて良かったです

◆元気にのびのび活動するようになる(15)

- ・自然に来ると生き生きとしている感じがします ・とても生き生きしていたと思います ・いつもよりのびのびしていました
- ・日頃とは違う経験なので、表情も生き生きとしていた ・都会で遊ぶよりも泥んこになる方が目がイキイキしていた
- ・田んぼの中に入ったときは意外と気持ちよかったです、日頃は田んぼに入るなどいっているの
- ・初めての田植えでいつも入ってはいけないと言っていますが、今日は入れてとても気持ち良かったです
- ・楽しそうにいました。話をきいていないようでもちゃんと覚えていました
- ・田んぼの中に初めて素足で入り、大変楽しそうにして喜んでいただけ良かったです
- ・ザリガニを釣ろうとはりきる姿が大きくなったなど成長を感じました ・田植えははじめての体験で、楽しそうでした
- ・今日は色々な生き物を自分で捕まえられて嬉しそうにいきいきしていました
- ・普段なかなかいないザリガニをたくさん捕まえることができうれしそうでした
- ・家ではゲームをしていることが多いので、こういった機会でも子どもが夢中になれてよかったです
- ・夢中になってザリガニとりをしていた。とてもいきいきした表情で生き物が大好きな様子が伝わってきた

◆主体性(8)

- ・自主的に色々なことができる一面をみました ・自分から進んで行動していて、いきいきとしていました
- ・教えてもらったことはすぐに興味を示し、自分でも試してみようとしていた
- ・自分が見たこと、感じたこと、発見したことを積極的に発言していた
- ・スタッフへ話しかけたり、手を挙げて大勢の前で発表するなど積極性が見られた
- ・先生の話をよく聞いて、すすんで網でザリガニをとっていた ・積極的に他の子どもと話すところが見られました
- ・いつも大人しく消極的な息子が今日は元気に話したり積極的に動いたりしていたので驚きました

◆新たな学び(4)

- ・自分の好きなザリガニを食べるカモを見ながら「かわいそうだけど仕方ないな」と命を繋ぐことの意味を知った
- ・思いっきり泥んこになって、ザリガニやエビを捕まえて、水の冷たさや網の使い方をおぼえて楽しめました
- ・普段町では気づかないような花や虫などに目がいついていた ・以前よりもザリガニの掴み方が上手になった

◆食欲増進(2)

- ・自分で作ったおにぎりをおいしそうにたくさん食べていた ・外でみんなで食べるので、おにぎりをたくさん食べていた

◆いつもと変わらない(2)

- ・いつも通り楽しく積極的に自然と関わっていました ・いつもの事ながら生き物好きが発揮されて益々元気でした
-

3. テキスト情報の分析結果

表2に抽出できた出現頻度の高い単語とその出現回数を、図3に利用頻度の高い各単語の関係を示す。

表2より3者の中で最も多く語られた単語は「出来る」「良い」の22語であった。児童の活動を褒める言葉が多数発生されていることがわかる。また「持つ(15)」「塗る(14)」「食べる(12)」「触る(10)」という行動を表す単語も多く、特に「食べる」「触る」といった五感体験が多く行われていたことがわかる。

次に主体ごとに発せられた単語の特徴をみると、まず児童は「食べる」という単語が9回と最も多く、“残りのおにぎり食べられるかな”や“ザリガニ食べる国だってある”などの発言が確認できた。また「ザリガニ(9)」「ムカデ(5)」などは実際に体験の中で目にした生き物であり、具体的な生き物の名前が多く発せられることが特徴といえるだろう。一方、親は「良い(13)」「出来る(7)」「頑張る(6)」といった単語が多く聞かれ、具体的には“(ザリガニが掴めて)良かったなー”や“重いけど最後まで頑張れ!”など児童を応援する立場で関わっていたことがうかがえた。さらにスタッフは「持つ(7)」「触る(6)」「塗る(5)」といった単語が多くみられ、“ザリガニのハサミの根っこを持ってね”や“クワガタも触っ

全体		児童		親		スタッフ	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
出来る	22	食べる	9	良い	13	凧	12
良い	22	ザリガニ	8	塗る	8	ザリガニ	7
凧	20	出来る	8	出来る	7	持つ	7
ザリガニ	17	良い	7	頑張る	6	出来る	7
持つ	15	ムカデ	5	色	5	遊び	7
塗る	14	持つ	5	行く	4	今日	6
手	13	赤	5	今度	4	手	6
駄目	13	タコ	5	青	4	触る	6
食べる	12	手	4	凧	4	赤	4
頑張る	11	書く	4	田んぼ	4	駄目	4
触る	10	植える	4	入る	4	凧	4
色	9	赤	9	駄目	4	美味しい	4
感じ	8	田んぼ	8	苗	4		
						塗る	5

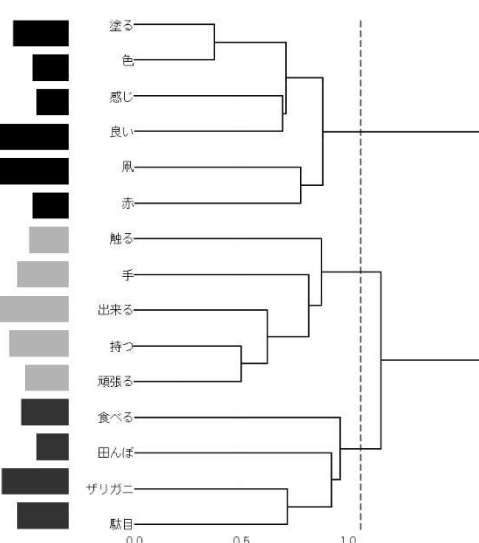


表2 抽出できた出現頻度の高い単語とその出現回数 図3 利用頻度の高い各単語の関係

てみる？”など、児童に体験を促す言葉がけが多く見られた。また親同様「出来る(7)」「頑張る(5)」という児童を応援する親ほど多くはないものの聞くことが出来た。

図3より利用頻度の高い各単語の関係をみると、まず1つ目のクラスターでは「色」「塗る」「赤」など凧づくりの中で行われた色体験が、2つ目のクラスターでは「触る」「手」「持つ」など触体験が、3つ目のクラスターでは「食べる」「田んぼ」「ザリガニ」など食体験が特徴として確認でき、各主体の会話から本プログラムの特徴はこの3つの体験に特徴づけられることが明らかとなった。

4. まとめ

最後に保護者から以下のような言葉が記されていたのでそれらを紹介して終わりたい。

- ・ザリガニや生物に対するやさしい気持ちが目覚めました。
- ・自然がいっぱいの所で普段なかなか出来ないことが出来ているので、子どもにとっていい経験だと思います。いつもと違う子どもの様子が見れることも良かったです。
- ・虫が苦手だった子が、ザリガニを素手で触れるようになりました。
- ・1年間、四季折々の自然に触れ合うことが出来て良かったです。
- ・自然の中でみんなと一緒に、田植えの時の土のヌルヌルや水の冷たさや、芋ほりの大変さを肌と体で感じる経験できて、子どもの成長になったと思います。
- ・自然の中であそぶ楽しさを覚えて、苦手な物やことにも挑戦して、一回り大きく成長できたと思います。ありがとうございました。
- ・知らない方と共にいろいろな体験をするのは、本当に新鮮でした。普段は経験することのない田植えやザリガニ探しなど、親子一緒にすることで、いい思い出になりました。
- ・なかなか家族だけでは体験できないことができて、とても良かったです。今しかできないことを、子どもたちにはたくさん体験して触れ合ってほしいと思います。